

「九 泉」

田村昌宏・滝川重徳

1.はじめに

古代～近世の墓にまつわるもうもの事象を、考古学的な視点を軸として考えてみようというのが、この連載の主旨である。今回は前号からの続きとして、中世編・近世編の二本立てで責めを果たすこととした。研究グループの活動原点である「墓地を歩く」ことは、まだ地に足のついたものではないが、これは今回掲載できなかった古代編と共に、次号に報告を期したい。

2.中世墓研究－これまでの軌跡－（加賀編）

本稿は「石川県下ではこれまでどのような中世墓の資料が紹介されているのか。」という素朴な疑問から始まった。今回は加賀編及び前号能登編で遗漏したものを掲載した。全般的な様相を見していくと、加賀地域は能登地域と比べ資料が少ない傾向にある。これは、石造遺物の数量の差異によると思われる。また、最近では加賀地域の中世墓の発掘件数が増加している。近年は三浦純夫氏と垣内光次郎氏が墓における地域の特性や石造遺物の概観などについて報告されている。

番号	執筆者名	発行年	遺跡名等	題名	書名	発行機関	備考
1	山森茂	1991 (西ヶ峰)	宇ノ気町 多田	宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	円形墳墓 刀	
2	西山憲治	1991	宇ノ気町 気屋 神徳寺	宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	宝鏡印塔 卵塔	
3	西山憲治	1991	宇ノ気町 中屋	宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	石仏	
4	西山憲治	1991	宇ノ気町 古屋敷の池	宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	三昧伝承地	
	奥村明		宇ノ気町 気屋 蘭塔	宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会		
5	橋本豊善	1991	宇ノ気町 鍬伏 閻神社	宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	五輪塔	
6	小池田 ンボウ	1991	宇ノ気町 谷 ホウジ	宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	五輪塔	
7	杉本長勇	1991	宇ノ気町 上田名	宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	五輪塔	
8			大日堂境内	河北郡誌		すり鉢 鏡 鏡 剣	
9	櫻井甚一	1974	宇ノ気町 余地	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔 宝塔
10	櫻井甚一	1974	津幡町 鳥越 弘願寺	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	宝塔
11	櫻井甚一	1974	津幡町 鳥越 大国主	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
12	櫻井甚一	1974	津幡町 王神社	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
13	櫻井甚一	1974	津幡町 北中条 三輪	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
14	櫻井甚一	1974	津幡町 御門 白山	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
15	櫻井甚一	1974	津幡町 七野 貴船	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
16	櫻井甚一	1974	津幡町 富田 白山	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
17	櫻井甚一	1974	津幡町 河内 八幡	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
18	櫻井甚一	1974	津幡町 加茂 加茂	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
19	櫻井甚一	1974	津幡町 下矢田 譲訪	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
20	櫻井甚一	1974	津幡町 市谷 八幡	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
21	櫻井甚一	1974	津幡町 太田 住吉	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
22	芝田 悟	1988	津幡町 鳥越弘願寺跡	鳥越弘願寺跡の寶塔一城	石川考古185号	石川考古学研究会	
23		1980	津幡町 北横根遺跡	郭寺院調査の記録(3)	津幡町谷内石山遺跡	津幡町教育委員会	珠洲焼窯場(13世紀後半)
24		1988	津幡町 刈安野々宮	遺跡	刈安野々宮遺跡	石川県立埋蔵文化財センター	
25	辻森由美子	1991	津幡町 越中坂	河北郡津幡町越中坂地内の遺跡について	石川考古205号	石川考古学研究会	珠洲窯 塚
26		1970	金沢市 普正寺遺跡	普正寺遺跡	石川考古学研究会	五輪塔 板碑 石仏 (14世紀後半~15世紀)	
27	吉岡康暢	1989	金沢市 普正寺遺跡	学史に残る普正寺中世墓 石塔群の調査	石川考古189号	石川考古学研究会	
28	吉岡康暢	1970	金沢市 小坂1号	石川考古学研究会会誌 第13号	石川考古学研究会	土塁墓 珠洲焼壺 (14世紀中~後)	
29		1971	金沢市 高尾城跡	高尾城址調査概報	石川県教育委員会	五輪塔	
30		1976	金沢市 塚崎遺跡	北陸自動車道関係埋蔵 文化財発掘調査報告書	石川県教育委員会	土塁墓 珠洲焼壺 骨 (15世紀)	
31		1978	金沢市 二塚・二ツ寺	二塚郷土史	二塚郷土史編集委員会	五輪塔	
32		1978	金沢市 二塚 赤土	二塚郷土史	二塚郷土史編集委員会	五輪塔	
33		1978	金沢市 二塚 佐寄森	二塚郷土史	二塚郷土史編集委員会	五輪塔	
34		1978	金沢市 二塚 雅日野	二塚郷土史	二塚郷土史編集委員会	五輪塔	
35		1978	金沢市 二塚 北塚	二塚郷土史	二塚郷土史編集委員会	五輪塔	
36	宮本哲郎	1993	金沢市 御廟谷墳墓群	石川考古学研究会会誌 第36号	石川考古学研究会		
37		1995	金沢市 額谷力カヤ ノ遺跡	金沢市文化財紀要121 額谷力カヤ遺跡	金沢市教育委員会		
38		1996	金沢市 金石本町遺跡	金沢市文化財紀要125 金石本町遺跡	金沢市教育委員会	五輪塔	

番号	執筆者名	発行年	遺跡名等	題名	書名	発行機関	備考
39		1997	金沢市 梅田B遺跡		石川県埋蔵文化財保存協会年報9	石川県埋蔵文化財保存協会	宝篋印塔
40		1998	金沢市 藤江C遺跡		藤江C遺跡地説明会資料	石川県埋蔵文化財センター	
41	上田永吉	1970	松任市 剣崎 寺田家		林中のうつりかわり	林中村誌編纂委員会	五輪塔
42	上田永吉	1970	松任市 剑崎 郷宮		林中のうつりかわり	林中村誌編纂委員会	宝篋印塔
43		1972	松任市 中奥 五器山		石川県中奥村誌	中奥村誌編纂委員会	五輪塔 宝篋印塔 珠洲腰 古瀬戸
44		1972	松任市 幸明 西方		石川県中奥村誌	中奥村誌編纂委員会	五輪塔 経石
45		1972	松任市 倉光 神社		石川県中奥村誌	中奥村誌編纂委員会	五輪塔
46		1972	松任市 三浦 中川家		石川県中奥村誌	中奥村誌編纂委員会	五輪塔
47		1972	松任市 乾 高田家		石川県中奥村誌	中奥村誌編纂委員会	五輪塔
48		1972	松任市 橋爪 地蔵堂		石川県中奥村誌	中奥村誌編纂委員会	五輪塔 宝篋印塔
49		1972	松任市 福正寺		石川県中奥村誌	中奥村誌編纂委員会	五輪塔 宝篋印塔
50		1972	松任市 幸明 共同		石川県中奥村誌	中奥村誌編纂委員会	五輪塔 宝篋印塔
51		1975	松任市 村井 円寿		石川県一木村誌	一木村誌編纂委員会	五輪塔
52		1975	松任市 米永 菖原		石川県一木村誌	一木村誌編纂委員会	五輪塔
53		1986	松任市 劍崎遺跡		劍崎遺跡	石川県立埋蔵文化財センター	五輪塔 越前焼甕 (14世紀末-15世紀前半)
54		1989	松任市 中村ゴウデン		松任市中村ゴウデン遺跡	松任市教育委員会	木棺墓 (12世紀)
55		1989	松任市 宮永坊の森		宮永坊の森遺跡	石川県立埋蔵文化財センター	
56		1990	松任市 徳光		徳光町誌	徳光町誌編纂委員会	五輪塔
57		1990	松任市 御廟谷		徳光町誌	徳光町誌編纂委員会	五輪塔 宝篋印塔
58		1991	松任市 村井キヒダ		宮丸遺跡・村井北遺跡 北出遺跡・村井キヒダ遺跡	石川県立埋蔵文化財センター	火葬土塚 (15世紀後半~16世紀前半)
59		1996	松任市 宮永市力キノ		米永古屋敷遺跡	松任市教育委員会	土塚墓
60		1997	松任市 中奥・長竹		宮永市力キノキバタケ遺跡	石川県立埋蔵文化財センター	土塚墓
61		1971	野々市町 未松庵寺跡		第5回石川県内市町村埋蔵文化財連絡協議会資料	石川県内市町村埋蔵文化財連絡協議会	五輪塔
62		1998	野々市町 扇が丘ゴシヨ		史跡未松庵寺	野々市町教育委員会	土塚墓か? (鎌倉期)
63	吉岡康暢	1963	鶴来町 日吉町墳墓		扇が丘ゴシヨ遺跡	石川県立埋蔵文化財センター	地下式塚 墓か?
64		1974	鶴来町 館畠・行町		鶴来町の古代中世遺跡	鶴来町教育委員会	加賀焼甕 (13世紀)
65		1985	鶴来町 白山町遺跡		館畠のあゆみ	館畠のあゆみ編纂委員会	五輪塔
66	垣内光次郎	1989	鶴来町 白山町遺跡	中世鶴来の遺跡と文化財	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来びとの暮らしこと祈り」	鶴来町史編纂室	
67	三浦純夫	1989(白山町墳墓)	鶴来町 白山町遺跡	中世鶴来の遺跡と文化財	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史編纂室	五輪塔 宝篋印塔
68	高堀勝喜	1989	鶴来町 白山カッサカ	鶴来町域における古代・中世の歩み	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来の足跡と文化財」	鶴来町史編纂室	65.66.67 と同遺跡
69	三浦純夫	1989	鶴来町 浄養寺墓地	中世鶴来の遺跡と文化財	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史編纂室	五輪塔 文明2年、3年、5年、16年、延徳3年記銘 宝篋印塔
70	三浦純夫	1989	鶴来町 三宮共同墓地	中世鶴来の遺跡と文化財	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史編纂室	五輪塔 宝篋印塔
71	三浦純夫	1989	鶴来町 三富墓山遺跡	中世鶴来の遺跡と文化財	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史編纂室	五輪塔
72	三浦純夫	1989	鶴来町 三宮町カンヌ	中世鶴来の遺跡と文化財	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史編纂室	五輪塔
73	三浦純夫	1989	鶴来町 白山上野B	中世鶴来の遺跡と文化財	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史編纂室	五輪塔
74	三浦純夫	1989	鶴来町 三宮町レンゲ	中世鶴来の遺跡と文化財	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史編纂室	五輪塔
75	三浦純夫	1989	鶴来町 白山青年の家前	中世鶴来の遺跡と文化財	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史編纂室	五輪塔 宝篋印塔 (室町後期) 一石
76	三浦純夫	1989	鶴来町 白山町かたが	中世鶴来の遺跡と文化財	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史編纂室	五輪塔 (室町後期)
77	三浦純夫	1989	鶴来町 日御子町	中世鶴来の遺跡と文化財	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史編纂室	五輪塔 宝篋印塔
78	三浦純夫	1989	鶴来町 曽谷町	中世鶴来の遺跡と文化財	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史編纂室	五輪塔
79	三浦純夫	1989	鶴来町 安養寺町	中世鶴来の遺跡と文化財	鶴来町史 歴史編 原始・「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史編纂室	五輪塔
80	三浦純夫	1990	鶴来町 釣鐘堂跡	加賀鶴来における有紀年銘五輪塔とその周辺	石川考古学研究会会誌第33号	石川考古学研究会	
81		1998	鶴来町 古宮遺跡		古宮遺跡	鶴来町教育委員会	白山比 神社周辺の石造物を紹介
82	吉岡康暢	1965	小松市 正蓮寺	小松市正蓮寺地内で礎石・陶器・五輪塔・炭化材が発見された	石川考古29号	石川考古学研究会	五輪塔
83		1972	小松市 津波倉ホット		紀要第7号	北陸大谷高等学校地歴クラブ	
84	宮下幸夫・小村茂・上野与一	1978	小松市 津波倉ホット	小松市津波倉ホットジ遺跡	石川考古学研究会会誌第21号	石川考古学研究会	地下式塚 美濃天目 (15世紀中~16世紀前半)
85		1973	小松市 軽海中世墓群		軽海中世墓址群 -発掘調査概報-	小松市教育委員会	配石墓 (14~15世紀前半)
86			小松市 牧口中世墓地		小松市史 第四巻	小松市教育委員会	塚 加賀焼甕 (13世紀末~14世紀前半)
87		1988	小松市 佐々木アサバ		小松市 佐々木アサバタケ遺跡	石川県立埋蔵文化財センター	五輪塔 宝篋印塔 宝塔
88	藤田邦雄	1989	小松市 牧口中世墓地	中世土器素描	北陸の考古学	石川考古学研究会	
89		1995	小松市 白江梯川遺跡		石川県人石川県埋蔵文化財保存協会年報7	石川県人石川県埋蔵文化財保存協会	五輪塔 宝篋印塔
90		1996	小松市 須見町西遺跡		石川県立埋蔵文化財センター年報第18号	石川県立埋蔵文化財センター	火葬場遺構

番号	執筆者名	発行年	遺跡名等	題名	書名	発行機関	備考
91		1997	小松市 八里向山F 遺跡		第5回石川県内市町村埋蔵文化財連絡協議会資料	石川県内市町村埋蔵文化財連絡協議会	積石塚2基、珠洲、加賀焼壺・鉢(13世紀後半)
92		1998	小松市 八幡遺跡 辰口町 下開発茶臼山		小松市八幡遺跡	社団法人石川県埋蔵文化財保存協会	土塙墓 五輪塔(15世紀前半)
93		1982	辰口町 湯屋チョウ ヅカ遺跡		辰口町下開発茶臼山古墳群	辰口町教育委員会	土葬墓(14世紀)
94		1987	辰口町 湯屋チョウ ヅカ遺跡		辰口町史 第二巻 前近代編	辰口町教育委員会	塚 土塙墓 五輪塔(13世紀~14世紀中)
95		1985	辰口町湯屋チョウヅカ遺跡		辰口町湯屋チョウヅカ遺跡	辰口町教育委員会	塚 土塙墓 五輪塔(13世紀~14世紀中)
96		1987	辰口町 和佐谷墓地		辰口町史 第二巻 前近代編	辰口町史編纂室	五輪塔 積石施設
97		1987	辰口町 金剛寺坂中世 墳墓群		辰口町史 第二巻 前近代編	辰口町史編纂室	塚 五輪塔 宝篋印塔(13世紀)
98	富本哲郎	1989	辰口町 金剛寺坂中世 墳墓群	中世墳墓の盗掘について	石川考古188号	石川考古学研究会	
99		1987	辰口町 銅谷中世墓 遺跡		辰口町史 第二巻 前近代編	辰口町史編纂室	五輪塔
100		1987	辰口町 岩本中世墓 遺跡		辰口町史 第二巻 前近代編	辰口町史編纂室	五輪塔 宝篋印塔
101		1987	辰口町 太口中世墓		辰口町史 第二巻 前近代編	辰口町史編纂室	五輪塔
102		1998	辰口町 富竹沙弥城山 遺跡		能美丘陵東遺跡群	石川県立埋蔵文化財センター	
103		1998	辰口町 富竹墓谷中世 墓群		能美丘陵東遺跡群	石川県立埋蔵文化財センター	
104		1993	根上町 西任田 西大 御神社		根上町史 史料編 上	新修根上町史編纂専門委員会	五輪塔(15世紀)
105		1993	根上町 五間堂 伽羅 御神社		根上町史 史料編 上	新修根上町史編纂専門委員会	五輪塔 宝篋印塔(15世紀)
106		1993	根上町 五間堂 ラン トウバ		根上町史 史料編 上	新修根上町史編纂専門委員会	宝篋印塔(15世紀)
107		1993	根上町 西二口町墓地		根上町史 史料編 上	新修根上町史編纂専門委員会	五輪塔 宝篋印塔(15世紀)
108		1993	根上町 福島 旧日吉 神社境内跡		根上町史 史料編 上	新修根上町史編纂専門委員会	五輪塔(15世紀)
109		1993	根上町 浜開発 西川 排水路		根上町史 史料編 上	新修根上町史編纂専門委員会	五輪塔(15世紀)
110	牧野隆信・ 小森秀三・ 田嶋正和	1979	加賀市 柴山中世墓 遺跡	柴山町出土の藏骨器	石川考古学研究会会誌 第22号	石川考古学研究会	火葬墓 珠洲焼壺 越前焼鉢(13世紀後半)
111		1987	加賀市 敷地天神山 遺跡		敷地天神山遺跡群	石川県立埋蔵文化財センター	地下式塚 土塙 (15世紀後半)墓か
112		1987	加賀市 三木だいもん 遺跡		三木だいもん遺跡	加賀市教育委員会	木棺墓(13世紀後半)

中世墓研究 これまでの軸跡 (能登 補遺編)

番号	執筆者名	発行年	遺跡名等	題名	書名	発行機関	備考
1	橋本澄夫	1989	珠洲市 法住寺墓地	惨!珠洲法住寺墓地の盗掘 現場を見た	石川考古192号	石川考古学研究会	
2	加賀真樹	1990	珠洲市 法住寺墓地	珠洲古陶関係遺跡詳細分布 調査について	石川考古197号	石川考古学研究会	
3	加賀真樹	1992	珠洲市 法住寺墓地	珠洲焼を巡る最近の状況 について	石川考古213号	石川考古学研究会	
4	三浦純夫	1999	珠洲市 法住寺墓地	石造遺物 考古史料	法住寺史料調査報告書	珠洲市教育委員会	
5	芝田 恵	1995	輪島市 三井町	輪島市三井町小泉の石造 遺物 一大用寺の五輪塔 所刻板碑一	石川考古231号	石川考古学研究会	
6	吉岡康暢	1966	柳田村 黒川	柳田村五十里にて横穴墓 1基、同黒川白山神社境内 に中世墓地を確認	石川考古35号	石川考古学研究会	珠洲藏骨器
7		1977	能都町 藤波遺跡	能都町で中世遺跡発掘	石川考古109号	石川考古学研究会	藏骨器
8	橋本澄夫	1974	中島町	能登縱貫自動車道建設工事 で中世?墳墓を破壊	石川考古84号	石川考古学研究会	
9		1977	中島町 長浦中世墓地	中島町で中世墳墓群発見	石川考古104号	石川考古学研究会	
10		1977	中島町 長浦中世墓地	長浦の中世墓地を発掘	石川考古105号	石川考古学研究会	五輪塔 藏骨器 石仏
11		1977	中島町 長浦中世墓地	県道工事で中世墳墓出現	石川考古111号	石川考古学研究会	
12	三浦純夫	1996	中島町	板碑の立つ風景	中島町史 通史編	中島町史編纂専門委員会	
13	高堀勝喜	1961	鹿島町	鹿島町の耕地整理中に四耳 壺と地蔵板碑が伴出	石川考古 5号	石川考古学研究会	藏骨器
14	吉岡康暢	1966	鹿島町 徳前	鹿島町農協裏山にて人骨を 包蔵した珠洲焼壺を発見	石川考古38号	石川考古学研究会	
15	橋本澄夫	1975	鹿西町 円正寺	金丸で中世墓が出現	石川考古85号	石川考古学研究会	珠洲藏骨器 人骨
16	金沢大学 文学部考古 学研究室	1990	鹿西町 阿弥陀敷遺跡	鹿島郡鹿西町西馬場阿弥陀 敷遺跡の発掘調査	石川考古203号	石川考古学研究会	
17		1977	志賀町 坪野遺跡	坪野の中世構造発掘	石川考古110号	石川考古学研究会	塚 藏骨器

3. 近世北陸農村部の墓地

前号では、金沢城下町における近世墓地の発掘調査例を紹介した。そこでは、土葬が主体というそれらの非在地性を論じるのに急で、真宗地帯・農村部における火葬の普及という事象を、自明のこととした感があった。大局的にはともかく、その起源、漫透の在り方、非真宗農村の葬法、その他の諸点で、本来一言で済ます問題ではなかった。その反省も込めて、今回は石川県とその隣県における、近世農村墓地の発掘調査例に焦点を当てることとした。

石川県を始め、北陸四県での近世墓の発掘調査例は、単独に検出されたものを含めても少ない。近年目覚ましく類例が増えつつある中世墓に比べると寥々たるものである。東京都など特異な地域を除けば、近世墓の調査例の少なさは全国的趨勢であるとはいえ、地方単位の比較では、九州・中四国・近畿・関東に遠く及ばないものと思われる。これは立地・継続性の他、北陸における近世墓・墓地の本質的な属性とあるいは関わるのかも知れないが、今は指摘のみに留め、数少ない調査例を概観したい。

石川県では、乾遺跡上面（松任市）^①、上町和住下遺跡（鳳至郡柳田村）^②等が調査されている。

乾遺跡は加賀平野の中央、典型的な平野部農村地帯に立地する。上層（近世）の遺構は方形（隅丸方形）・円形（橢円形）を呈する、一辺ないし径1～3mを測る土坑が主体で、内部に集石を持つものも認められる。土坑内の出土遺物として、中国・肥前・越中瀬戸・越前等の各種陶磁器の他、漆器椀、煙管、経木塔婆、被熱により溶着した銅銭等がある。人骨は未検出であるが、遺物の性格から、墓地跡である可能性が高い。また陶磁器各製品の特徴から、遺構面の年代は17世紀前半頃を中心とすることが考えられる。なお溶着銅銭の出土は火葬を示唆するが、経木塔婆の墨書は、宗派上真言宗に関連するものとされる。

上町和住下遺跡は能登半島北部、いわゆる奥能登の丘陵地帯に位置する。縄文時代中期の集落が主体であるが、台地縁辺部において火葬骨を埋納した土坑・ピット11基、火葬炉跡1基が検出された。下部の炭層と上部の地山質土との間に火葬骨が集中する、径40～100cm前後の土坑が多い。陶製蔵骨器を用いた土坑は1基のみであり、副葬品はみられない。陶製蔵骨器は内面に格子目状の當て具痕を残す肥前陶器タタキ小甕で、17世紀後半～18世紀前半頃の生産年代が考えられよう。なお火葬炉跡は炭化材・焼土塊を含む溝状の遺構で、通風溝部分が遺存していたと思われる。

富山県では、印田近世墓（魚津市）^③、安養寺遺跡（富山市）^④、下老子 笹川遺跡A2地区（砺波郡福岡町）^⑤、中名 遺跡A2区・持田 遺跡（婦負郡婦中町）^⑥等がある。

印田近世墓は魚津市街東郊、純水田地帯に立地する。調査前は水田畦畔上に残された、わずかな塚状高まりといった外觀を呈し、中世後半の板石塔婆（板碑）が1基立てられていた。調査の結果、塚状高まりを構成する盛土中から越中瀬戸の蔵骨器6点が出土した。蔵骨器のうち3基には、銅銭がそれぞれ2枚・7枚・1枚副葬されていた。銅銭は確認できるものはすべて寛永通宝であり、寛文8年（1668）初鋳の文銭等いわゆる新寛永が含まれる。報告では改葬の可能性も指摘されている。

安養寺遺跡は富山平野の中央、神通川支流の熊野川右岸に立地する。近世墓関連の遺構として、一辺2～3mの略方形形状を呈する土坑中に、礫をコの字状に配する「配石墓」3基、径1m強の略円形を呈する「土壇墓」2基の二種が検出されており、双方から越中瀬戸の皿、「土壇墓」からは加えて鉄製品・釘が出土している。遺構の形状から墓である可能性は強いが、いずれも人骨は未確認である。

下老子 笹川遺跡は砺波平野を構成する庄川扇状地扇端部に立地する。A2区は近世村落の縁辺部に相当し、火葬骨・炭片を大量に含む土坑1基の他、火葬炉の可能性がある長円形の皿状土坑が検出されている。A2区周辺から出土した遺物の時期は、近世後半が主体となる。

中名 遺跡・持田 遺跡はともに富山平野の西南部に位置する。中名 遺跡A 2地区では中近世の屋敷地の一角が検出されており、近世土台建物に近接して炭化物・焼骨片が含まれる土坑が2基認められる。調査担当者は茶毘の場である土坑をそのまま墓にしたものと評価し、一般に葬儀の簡略化を教是とする浄土真宗の影響を指摘している。持田 遺跡B区では楕円～長円形の配石墓が3基検出された。焼骨片・中世陶器（八尾窯）以外に出土遺物はないが、覆土から近世に属すると考えられている。

新潟県では大墓遺跡（西蒲原郡黒崎町）⁷⁾、焼屋敷遺跡近世墓（燕市）⁸⁾等が調査されている。

大墓遺跡は新潟平野の一角、信濃川支流の自然堤防上に所在するもので、調査前は約5～7m四方、高さ約70cmを測る土壇状地形を呈していた。調査の結果、土壇＝墳丘上部・下部とその周辺において、蔵骨器10点以上・火葬骨埋納穴51基が検出された。陶製蔵骨器は主として墳丘上部に、火葬骨埋納穴は墳丘中部・下部に分布している。墳丘中部の火葬埋納穴から肥前陶器碗・皿、瀬戸美濃系陶器灰釉内禿皿等16世紀末～17世紀前半頃の製品が出土しているが、蔵骨器を含め墳丘上部の出土陶磁器は17世紀後半以降の製品で占められる。

焼屋敷遺跡近世墓は新潟平野の中央、大墓遺跡と同じく自然堤防上に発達した集落のはずれに所在する。近世墓は一辺12～13m、高さ約1mの土壇＝墳丘を盛土造成し、この上部に蔵骨器を埋納するものである。蔵骨器は墳丘上径2m程の範囲にのみ5点検出された。蔵骨器は、素焼陶器（土器？）壺3点、肥前陶器タタキ小甕1点、同松絵水甕（刷毛目系二彩手）1点で構成される。確実な副葬品は認められない。本近世墓は「登坂家」という旧家が所有していたもので、かつて天保3年(1832)銘の墓標が1基残っていたが、調査前までに移転した。また蔵骨器の少なさは、近年の改葬の結果によるものと思われる。

以上の例が全てではないにしろ、まとまった発掘調査報告としてはめぼしいものである。だがわずかな事例とはいえ、何らかの傾向を見いだすことは不可能ではない。

まず乾遺跡上層・安養寺遺跡で検出されたやや大型の土坑・「配石墓」であるが、これらは年代上、近世でもごく初期に位置付けられ、むしろ中世墓との近縁性・連続性を感じさせる。

一方、印田・大墓・焼屋敷の近世墓はいずれも水田に囲まれた塚状高まりとして存在していたものである。立地こそ違え、上町和住下の場合も、報告によれば近世土坑一帯は周囲より一段高く、土壇状の構造物があった可能性が指摘されている。この例を含めても、土壇（墳丘）の大きさは一辺10m前後に収まる。焼屋敷の例を敷衍すれば、これらは家単位の墓地であった可能性が考えられる。

また中名・下老子笠川・持田 各遺跡の事例は、屋敷地内に営まれるか、もしくは集落域に近接し、墓坑が集中しないという特徴が類似する。加うるに副葬品・蔵骨器の欠如等、全般に簡素な印象を与えるものである。

以上発掘調査の成果からは、一応3タイプの近世墓の存在が認識できる。この中には、典型的な集落単位の墓（村墓）が含まれないが、現在加賀平野の各集落に見られる墓地は、近代以後移転を繰り返した場合もあるが、存在自体は近世に遡るものと考えられるので、偶然か、あるいは現代への継続性に関わるのか、何らかの理由で発掘調査が及んでいないのであろう。

葬法については、取り上げた事例がいかにも少なく、全体の趨勢が判明するわけではないが、火葬の普遍性は否定し難いところであろう⁹⁾。それはともかく、火葬の普及と、浄土真宗の浸透、そして全国的には戦国期以後進行する百姓層の墓地形成というそれぞれの事象がどのように関連し、17世紀後半以後の近世的百姓の墓制へ帰結してゆくのか¹⁰⁾、また小稿で確認した近世墓の各タイプはこの流れの中でどう位置付けられるのか¹¹⁾。これらを「九泉」の課題の一つとしておきたい。

今回は紙幅の都合もあって発掘調査のみの紹介に終始したが、近世墓地にしても発掘調査の対象となるものは、大抵の場合、上部施設が失われている。この点で発掘調査は必ずしも全てを解明できる方法とは言えない。むしろ近世の景観を残した墓地が消えゆく中、現存墓地の踏査が急務であり⁽¹²⁾、発掘調査と相互補完的に成果を挙げてゆくことが望まれる。

註

- 1)(社)石川県埋蔵文化財保存協会 1992 「乾遺跡」『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報 3』
- 2) 小嶋芳孝・岩瀬由美他 1998 『上町和住下遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 3) 斎藤隆・麻柄一志 1981 『印田近世墓発掘調査報告書』 魚津市教育委員会
- 4) 藤田富士夫 1998 『富山市安養寺遺跡発掘調査報告書』 富山市教育委員会
- 5) 財団法人富山県文化振興財団・埋蔵文化財調査事務所 1996
「下老子 笠川遺跡 A1・A2地区」『埋蔵文化財調査概要 - 平成7年度 -』
- 6) 財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所 1997
「中名 遺跡 A2区」「持田 遺跡 B地区」『埋蔵文化財調査概要 - 平成8年度 -』
- 7) 新潟県教育委員会 1973 「西蒲原郡黒崎町大墓遺跡調査報告」『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 8) 新潟県教育委員会 1976 「焼屋敷遺跡」『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 9)『富山大百科事典 下』(北日本新聞社 1994)によれば、富山県=越中のうち、大沢野・立山・大山・小杉・福岡の各町、及び五箇山地方では、江戸期の土葬跡が確認されるとある。近年小杉町高寺遺跡で近世土葬墓が発掘された例もある(宮田進一 1998 「各地域の動向 富山県」『北陸中世の金属器』 北陸中世考古学研究会)。但し高寺遺跡は真言宗蓮王寺の門前に位置する点が注意されよう。
- 10) 真宗地帯には、遺骸を荼毘に付した後、焼骨の一部を本山・檀那手寺に納めるのみで、墓(石塔)を設けない地域のあることが知られている。真宗の教義に照らせばこのような在り方がむしろ正統的であったと推測する向きもあり、本文の冒頭で触れた、北陸地方の近世墓地発掘調査例の少なさを考える上で示唆的である。
児玉誠 1976 「真宗地帯の風習 - 渡りの宗教生活を探る -」『日本宗教歴史と民俗』 隆文館
(最上孝敬編 1979 『葬送墓制研究集成 第四巻・墓の習俗』 名著出版 所収。)
蒲池勢至 1993 「「無墓制」と真宗の墓制」『国立歴史民俗博物館研究報告第49集』
- 11) 大墓遺跡では、土壇の基盤面・土壇の中位盛土面から切り込まれた火葬骨埋納穴が注目される。近世初期以前から墓地であった場を受け継ぐ一方、土壇構築という新たな区画原理を設けることにより、家単位の墓=イエハカが形成されてゆくプロセスが、ここから読み取れはしないだろうか。
- 12) 発掘に拘らない、現存墓地についての優れた研究として、石川県では輪島市時国家墓地の調査がある。
吉岡康暢他 1995 「奥能登時国家墓地の調査 - 上時国家“古墓”を中心に」『奥能登と時国家調査報告編2』 神奈川大学日本常民文化研究所奥能登調査会編 平凡社